

報告

コスモポリタン教育の核心 ～「内にコスモスを持つ者」たちの軌跡とその展望～ (2017 年度中部支部大会 シンポジウム 報告)

鈴木 繁夫^A

左から、福田謙之氏、堀口英則氏、坂本宗明氏、南寿樹氏。 参加者 34 名
(写真撮影：田中忠芳)

2017 年 10 月 26 日、金沢工業大学において開催された第 4 回中部支部大会において、約 2 時間（午後 1 時 40 分～午後 3 時 55 分）にわたるシンポジウムでは、上記のテーマで 4 人のパネリストを迎え、会場ではフロアを巻き込んで活発な議論が展開した。

冒頭、鈴木（司会）から、トランプ政権誕生後の世界において顕在化したのは、グローバル資本主義にふさわしいグローバル人材の育成だけではなく、自らの守備範囲において共生を試みている人材、言い換えるなら「内にコスモスを持つ者」、コスモポリタンの育成であることが指摘された。そしてその意味では登壇者はいずれもコスモポリタンであり、またそのような人材を生み出すべく活動していることが紹介された。

最初に、福田謙之氏（金沢工業大学）は同大学の一期生であり、事務方の長として母校の改革に乗り出し

た。そこで氏が目指したのは、質が保障されたアメリカ型の教育課程の実現化であった。授業番号制、GPA はいうまでもなく、学生自身がテーマを決め、実験・工作設備を 24 時間自由に使える場の提供（「夢考房」）を始めた。こうした流れを理解してもらうために、大学負担で、ほぼすべての教員に、米国大学へ視察研修をしてもらった。また夢考房のような場の提供には、運営時間の負担と事故責任への不安が伴うが、「学生が主役の大学」という信念から、ひいては様々な分野の研究者と学生との交流による「知的なディズニーランド」構築という構想から、工房独自の運営体制を作り上げていった。氏の心意気は、方向こそ違うが、欧米へ日本文化を発信し続けた金沢人コスモポリタン・鈴木大拙のそれを感じさせた。

『偏差値 37 なのに就職率 9 割の大学』で著名な堀口英則氏（金沢星稜大学女子短期大学部）は、4 年間の居場所を競う大学受験ではなく、43 年間のそれを競う就職活動という発想の転換が基本にある。当初は就職

A: 名古屋大学大学院・人文学研究科

支援センターの長として、氏自らが企画立案したプレゼン力、論理思考を鍛えるユニークな就活講座を設け、また講座運営にも深く関わっていった。現在では同校は圧倒的な就職率と優良企業への就職を実現しているが、これは大学受験への単なる「倍返し」ではない。講座・就活・内定を通じて学生は自己効力感を高めるだけでなく、講座の中には大学補助によるセブ島留学とスラムでのボランティア活動も含まれ、「自分はこんなに恵まれていたのか」と他者への共感度も強くしている。また上海やウラジオストックへの「就職合宿クルーズ ほし☆たび」(現地集合・現地解散)では、船内で行われる自己分析を通じて学生が自己肯定感を強めていく。このように、人間力を高める教育プログラムを氏は実践しており、学生が輝き出すことに深い喜びを感じている。

坂本宗明氏(金沢工業大学)は、「夢考房」をさらに一歩進め、モノ作りを媒介とした日本人学生とアジア人学生との協働を通じた課外活動プログラム Learning Express を実践している。氏は、その特徴を次のように要約した。

- (1) 国際的な技術者教育の基準である CDIO 標準に基づいて設計されている。
- (2) 新興国における生活体験を通じ、地域社会に存在する課題を住民の立場から考える没入体験型学習プログラムである。
- (3) 複数国の学生と現地居住者が、文化的差異を超えて協働し、問題発見・解決に取り組む「共創」プログラムである。
- (4) 工学系・理学系のみならず、経営系や心理系、メディア系など多様な専門分野を学ぶ学生が参加する異分野横断型プロジェクトである。
- (5) 大学初年次から大学院生まで幅広い学生の参加が可能である。
- (6) 全ての活動がチーム協働として実施される。
- (7) 問題発見・解決活動においては、人間の行動と心理に重点を置いたイノベーション技術である“design thinking”を用い、ただ単に技術的

な解決案を導くのではなく、地域社会における生活や文化的背景を共有し、実現可能かつ現地の人的・物的資源によって持続可能な解決案を創り出す。

これら7項目には、横断と縦断、そして共同と共生という意匠が貫かれており、このプログラムが学生をコスモポリタンへと変身させる跳躍台になっていることがわかる。「地球上の何処にあれど、物事を楽しめる学生を育てたい」という氏の思いがにじみ出ている。

四人目のパネリストは、愛知県立大府特別支援学校の教諭でありながら、その卒業生とともに人形劇団を作り活動している南寿樹氏である。氏は「ハンディキャップを持つ子の小さな願いの実現に力のベクトルを合わせてほしい」という熱い思いの持ち主である。氏の劇団は、国内の被災地での上演にとどまらず、その活動は海外にも及んでいるが、それは氏が独りでなし得ることではない。人形製作、歌、通訳などのプロを始め、移動にあたって進んで介助を申し出る人々がいればこそである。人形は障がいを乗り越えるための単なる道具でもなければ、劇団活動は障がい者でもここまでやれますという憐憫機会でもない。この活動は、「小さな願い」を火種として、人形という仲間を介して、それまで互いに交流のなかった人たちのつながりを生成させ共生を作り出していくものなのだ。

これら4氏の活動は、自分のポジションが脅かされず今日が昨日と同じであればよいという内向き志向とは無縁である。各氏の思いは頭の中の夢想や言葉で説く理想ではなく、地に張り付いてその根を広げ、現実を、そしてその場で生活する学生・青少年たちの自己効力感・肯定感を高め、彼らの人生を豊かにしている。物質的に豊かである日本では、各氏のようなコスモポリタンを育てること、また各氏の活動を通じて生まれるコスモポリタンたちがいることは忘れてはならない。

受付日 2017 年 12 月 10 日、受理日 2018 年 3 月 10 日